
黒の春

キング

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黒の春

【Nコード】

N8078A

【作者名】

キング

【あらすじ】

最近変な現象が起きる。記憶が少しの間、とんでしまうのだ。その間、何をしていたかなどわからない。そんな現象が引き起こす様々な出来事。

真っ黒な世界にだって春は来る

大通りを少し離れた路地裏から、肉と肉がぶつかる音と悲鳴と笑い声が漏れてきている。

「勘弁してくれ、もうやめてくれ」

「ハッハッハ、くたばれ、くたばりやがれ」

足音と息を激しく吸ったり吐いたりする音が、遠くからだんだんこちらに近付いて来る。

「おまわりさん、こつちです。はやくっ」

「はいっ」

「ちっ警察かつ、邪魔しやがって」

「あれっ、たしかにいたはずなのに」

「何もないですね」

「すみません、お騒がせさせてしまって、勘違いだっちみたいです。すみません」

「いいんですよ、事件がないにこしたことはないんですから」

警察なんかちよろいもんだ。んっ、この発作は、今日はここまでか。「あっああああ、うううっ、うわぁー」

なんだかまたなんかやってしまったみたいだ。服がえらく汚れてしまった。腕にはなにか鋭いものが刺さった傷があり、そこからはまだ血が滲んでいる。ガラスの破片かな、ビール瓶かも。

腕にまかれた時計をみると、短針は十一をさしていた。母さんに帰ると約束した時間からもう二時間もたっている。母さんがいる日に約束までして家を出たのが間違いだったな。母さんになんて言い訳しよう。

こつそりとドアを押し家にあがった。靴を静かに脱ぎ、足音をたてないように廊下を歩き始めた。いろいろ言い訳を考えた結構、気付かれないようにするという結論にいたった。案の定母さんはもう寝ていた、テーブルに手紙をおいて。

「ご飯は冷蔵庫に入ってるから」
家族とは思えないほどの短さ、家族だからかな。俺は冷蔵庫をあけると、中にはコンビニ弁当が入っていた。驚きはしない、日常だ。弁当を取り出すと、弁当を空けサラダだけ取りだし、レンジにいった。シャキシャキのキャベツの千切りまで温められてしなしなになられてはたまらない。

黒の春、二節目。学校に行く。

弁当を食べ終わると、シャワーを浴び、すぐにベッドの上に倒れ込み、目を閉じ眠りについた。

朝起きて、ついさっき見た夢のことについて考えた。俺が俺を見て
いる。だけど見ている俺は何もできずに、暴れまわるもう一人の俺
を見ている。不思議だったが、なかなかリアルだった、リアルすぎ
て少し不安になるくらい。

最近たまにふと記憶が飛ぶことがある、その間俺が何をしていたかどこにいたのか全く覚えていない。今日の夢と関連があるのだろうか。たまに我にかえると、誰かを殴ったりしていたことがあったが、殴られるべきして殴られた、みたいな感じだったので気には止めなかったが、さすがに夢にまで見ると少し不安になってくる。

俺はいつもの電車に乗り、いつものような高校に向かった。俺の通う高校はどこにでもあるような公立高校だ、他と違ふところといえ
ば全校生徒が二千人と、馬鹿に人数だけ多いというだけだ。これだ
けの人数がいるためか、教師も生徒も全校生徒なんて把握のしやう
がない。

俺は無言で教室に入り、いつもの席にすわった。

俺には友達はいない。

入学そうそうクラスの奴九人をボコボコにしたのがいけなかったのかも。

きつとそうだ、そのあとからほぼ全員俺にちかよらなくなつたから理由は簡単だ、その九人がゴムボールで野球をしていた、教室で、しかもバットは箒。そのボールがライナーで俺に当たつたのに、彼らはへらへらへらへらとごめんなさい。つい力チンときて手をあげてしまつたんだ。記憶が飛んだ状態で人を殴るのは多少困るが、自分の意思で殴るのならなんの問題もない。

三節目

「おはよう桜井君。桜井君携帯の使い方はわかってるよね。いやわかってるはず、前はしっかり出れてたから。なのになんで昨日は出なかったの」

桜井というのは俺の名字だ。

「朝っぱらからうるさいな、一体お前が俺の何だっというんだよ。家族でもなければ恋人でもない、血すらつながってない。なのになんでお前とそんなに密に連絡を取り合わなきゃいけないんだよ。もうずっと電話してきてる。一体お前は俺の何なんだ、答えてみる」

「舎弟」

「そうだ。だったら兄貴分を振り回すのはやめろ、兄貴は一人になりたいんだ」

俺は空手、柔道の有段者でボクシングもかじっている。

クラスでパシリに使われていた石井は俺という存在何かを感じたらしい。ある日石井は唐突に俺弟子入りを申し込んで来た、俺はもちろんことはった、しかしそれで奴のなにかに火が付いてしまったみたいで、その後何十回も頼み込まれた。俺も意地になって断り続けた。しかしある日、俺の携帯に一本の電話がかかってきた。

「もしもし桜井君。僕です、石井です、前々から言ってるんだけど、弟子入りさせてください。お願いします」

そのときのことはよく覚えている、ものすごくドキドキした。なんでコイツは俺の番号を知っているのだろう。俺は不甲斐なくもそのとき恐怖を胸のどこか隅のほうで抱いた。

このままいったら俺のプライバシーすべてをコイツに調べられる。そう思った俺は仕方なく承諾した。

「しかしな石井、弟子はなんとなくナンセンスだ」

「えっ、じゃあ何にすれば」

「お前は今から俺の舎弟だ」

というわけで石井は俺の舎弟になった。

帰り道、他校の生徒に喧嘩を売られた。売られた喧嘩は買う主義なので、俺は例外なくここでも喧嘩を買った。

「お前が西高の桜井か」

西高は俺の通う高校、コイツらは多分南高だと思う、制服からして。

「そうだけど、なにか」

「この前うちの奴らが世話になったみたいで、お礼がしたくてうずうずしてたんだよ」

そんな覚えはない。だから記憶が飛んでしまうのがいやなんだ。

「石井、少し離れてろ。流れ弾くるかも知れないぞ」

俺は十メートルくらい後ろを着いてきていた石井に言った。

敵は合計四人。まず一人が俺の顔面にフック気味のパンチを繰り出してきた。俺は素早くしゃがみ、そいつの足を足で払った。見事に一回転して地面を頭を打ち付けて気を失った。

二人目はストレートを出してきた。俺はクロスカウンターで応戦した。俺の拳がそいつのこめかみにジャストミートしたとたん、泡を吹いて地面に倒れ込んだ。

もう一人は逃げ出した。賢明な判断だ。

そして最後にリーダー格の奴。だけどどうみてもリーダーには見えない、弱そう。

小動物の雄叫びのような声をあげてそいつは走りかかってきた。表情からは恐怖は感じられる。ご愁傷さま。

俺はがら空きの顔面に右ストレートを打ち込んだ。鈍い音とともにそいつは手で鼻をおさえてしゃがみこんだ。手からは血が漏れている。俺の拳にも奴の鼻血が。奴は血をみると、白目を剥いてその場で気を失った。血の付いた拳をそいつの服で拭き取ると、俺はまた何ごともしなかったかのように歩き出した。

四節目

いつの間にか追いついていた石井が言った。

「やっぱり桜井君はすごいな、今度僕にも教えてよ、あのクロス、クロスカウンターっていうの、あの交差してたやつ」

「いやだ」

「なんで」

「お前覚え悪そうだから」

断ってしまってから、こいつが恐ろしくしつこいことに気付いた。

「なんでだよ、教えてよ。僕こう見えても粘り強いんだから」

「そんなことわかってるよ。わかったから、いつかな、いつか」

長くなるのも面倒だったので、

こつちが折れることにした。

「いつかっていつ、いつなの」

ガキかお前は。

「来年」

「遅い」

「来月」

「遅い」

「お前文句ばかり言ってるんじゃないよ。ああーもうやだ、さっきの教える発言撤回」

「ごめんなさい。わかったよ、じゃあ来月ね」

「はいはいはいはい」

「僕こつちだから、じゃあね」

「ああ、早く帰れっ」

だんだん薄暗くなっていく空の下、まだ活気が残る商店街を俺は一

人、家へと歩いて行つた。午後八時、家には俺しかない。うちは母子家庭だ、父親がいない。俺が保育園のときくらいに二人は別れたらしい。

保育園に通つた記憶くらいはみんな覚えているみたいだが、俺はなぜか覚えていない。

だからなぜ二人が別れたのかはしらない、高校生にもなると大人のいろいろな事情がなんとなくわかつてきて、聞くに聞けない。母さんもその話題がでると流すし。

けど特に親が一人いないくらいでも支障はない、親は母さん一人だとずっと思つて生きてきたし、妻と子をおいていった奴を今からどうしたつて親とは思えない。

母さんはいつも夜遅くまで働いて家計をたててくれている、俺もたまに喧嘩相手の財布から生活費を稼いでいる。

贅沢はできないけど不満はない、俺はこの生活に満足している、毎日コンビニ弁当の生活にも。

五節目

夜の街は寂しすぎて好きじゃない。

馬鹿で愛に飢えた不良どもが人のぬくもりを求めて、狼のようにアスファルトの上を嗅ぎ回っている。東にならなければ喧嘩もナンパもできないほどの寂しがり屋のくせに、虚勢をはって吠えている。また、それに付け込んで一儲け企んでいる大人の醜く臭いにおいが充満している。

なんとも悲しく寂しく苛立たせる空気だ。けどあまり嫌いではない。コンビニに行く途中で黒いスーツに紫のネクタイ、そしてスキンヘッドの男達が俺を見てきた。

俺は、奴等が見えなくなるまでずっと睨み付けてやった。お前ら臭いんだよ。それにしてもなんで、こういうやつてこんなに分かりやすい格好をしてるんだろう。

コンビニの前には、ウンコ座りをした中学生くらいの奴が三人、タバコを吸っていた、

「タバコくらいすわなきゃやっていけないよな」

俺は三人にそう言って笑って見せた。

タバコを吸うにはまだ少し早い気がするけれど、まわりの環境が彼らに吸わざるをえなくしているんだろう。

「俺にも一本くれよ」

そう言つて俺は三人の中に座り込み、タバコを吸いおえるまでの間、彼らと他愛もない話をした。

三人は本当に中学生で、このあたりでは結構有名人の俺に憧れているみたいだった。

タバコのフィルターを通して吸う街の空気は、そのまま吸うよりは幾分かうまかった。

タバコを吸い終わると、弁当をさっさと選りコンビニを離れた。

離れ間際、三人が

「また来てくださいよ。大抵はここにいますんで」

と俺の背中に話しかけたので、俺は振り返り少しはにかみながら、
「タバコもなんでもやり過ぎるなよ。そこらへんの奴みたく馬鹿になっちまうぞ。お前らがずっと今日みたいに変わらないでいたら、また来てやるよ」

と言った。

そうするとあいつらはタバコの火をすぐに消し、俺に頭を下げた。

俺はあいつらの後頭部に手を降って別れた。

こんなにも良い奴だっているのに、街のにおいはそれをも覆いつくすほど無情で強大だった。

それが悲しくて寂しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8078a/>

黒の春

2010年12月9日14時45分発行